

沖縄県座喜味城建築群の創造復元について

三上訓顯

沖縄県巨大グスクにおける城壁内の建築空間は、出土品と同様に創建時から変わらない空間規模を現代に伝えてくれる手がかりだ。当時の資料に基づき建築空間の創造復元を試みることは、当時の生活の一端を探るシミュレーションになるだろう。少なくとも建築構造上において一定の合理性がなければ建築空間は成立しなかったのであるから、建築学的な復元のための研究方法も存在する。文化財科学の一方法である。

そうした沖縄県巨大グスクのなかで座喜味城は、面積が最も小さく城主も約十数年の居住で中城城へ移転していった。こう経緯をみればテンポラリーな城郭といえそうだが、その築城技術は永続的な城のそれと同じであり、城壁の一部は現存してきた。それだけに城壁の復元も当時の姿に近似しているであろう。

そこで仮説の1つとして、これまでの出土品や遺構跡を手がかりとし城壁内建築空間の創造復元を試みた。その結果として意外にも数の少ない建築群であり、それ以上に建築空間創造復元の手がかりを与えてくれない城だと思われた。

キーワード：中世琉球、座喜味城、城壁跡、建築創造復元

1. はじめに

本稿は、沖縄県内で世界遺産に登録されている城跡のなかで本稿では、座喜味城の建築群創造復元についてとりあげる。

現在座喜味城は建設当時の城壁が復元されており、発掘調査によって出土品も発見されている。

沖縄県の5つの巨大グスクのなかでは、座喜味城跡の面積規模城跡のなかでは最小である。だが琉球王朝成立以前の城である点では巨大グスク同様の歴史経緯をもっている。我が国では鎌倉時代から室町時代に該当する。図-1は、座喜味城の復元された城壁の城門である。

本稿では、琉球史に沿って発掘調査による出土品及び遺構を踏まえ、座喜味城建築群の創造復元モデルの提案をおこなうことを研究目的としている。

建築空間も重要な史実の一つであるとする筆者の姿勢は変わらない。空間規模は当時と変わらないから、建設可能な建築群の規模も空間原理を用いて復元可能である。また創造復元とは、史実を踏まえ当時の建築形態や技術水準を踏まえ、おそらくこうであったとする仮説に従って全体像を空間上に復元してゆくことである。それは今後の議論のため、そして創建当時の城全体の姿を現在に蘇らせるため

の仮説モデルの一つとして位置づけられる。

研究方法は、創建当時の建築技術水準、歴史、発掘成果、城郭の空間規模を踏まえながら、建築学の空間形成手法を用いておこなってゆく。

2. 座喜味城の立地と歴史

現在座喜味城跡（沖縄県中頭郡読谷村座喜味708-6）は、標高120mの丘陵地山頂に立地し、読谷村のほぼ全域を眺められる景観上の特徴がある。1973年文化庁国庫補助事業に



図-1. 現在の座喜味城表門（2021年筆者撮影）

指定され、城壁の復元工事が行われてきた。2000年12月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界文化遺産に登録され現在に至る。図2で座喜味城趾の配置図(注1)を示した。琉球石灰岩による城壁の外周は365m、城趾面積7,385㎡であり、城壁内は二つの郭で構成され、沖縄県巨大グスクのなかでは中規模にあたる。立地は北-東-南面は急峻な地形であり、北西面からアクセスできる。

座喜味城の主要な出来事を琉球史(注2,3,4)から抽出し表-1にまとめた。これによると当時山田城主であった護佐丸が1430年代に築城して移り住み、以後護佐丸は十数年の間城主として居住した後に、中城城を築城し移転してしまった。座喜味城は、僅かな期間だけ機能した城である。

1458年に勝連按司によって中城城主護佐丸は滅ぼされ、以後座喜味城は首里王府の直轄地となっていた。このように中世座喜味城の歴史は記述が少ない。

座喜味城趾は、沖縄返還後数次にわたる発掘調査がおこなわれてきた。その結果、アーチ型の城門、さらに相方積みや布積みといった本格的な城壁の設えは、僅かな期間に存在した城としては少し過度な設えである。それは赤土という軟弱地盤を補強し崩れにくい構造形式を採用したとするのが地元の理解である。

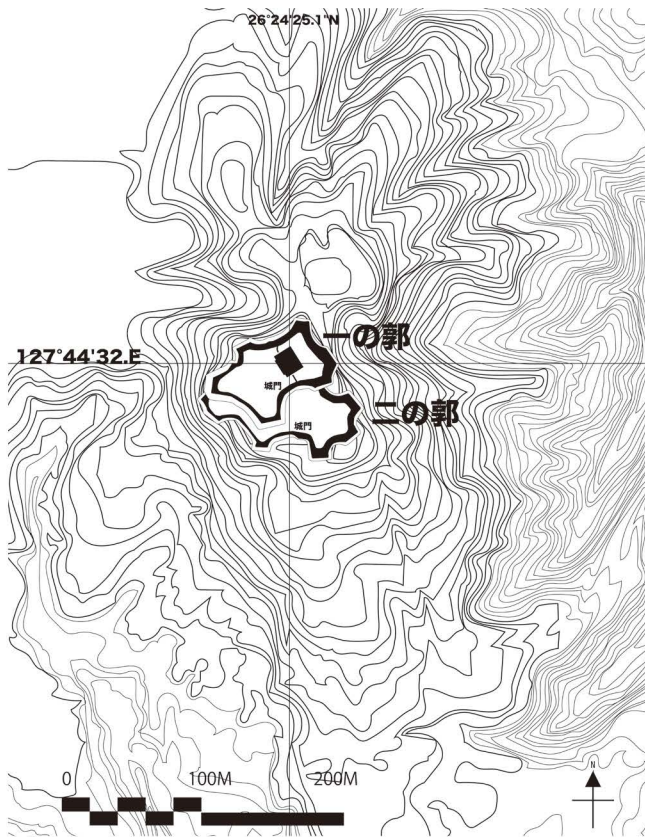


図-2. 座喜味城の配置図

表-1. 座喜味城の概略史

座喜味城の歴史	関連する歴史
1400 1416-1422. 按司護佐丸により築城。 按司護佐丸は旧山田城を取り壊し、そこから石材などを運び出し、座喜味城を築いたと伝えられる。 以後、護佐丸は中城城を築城し移転する。 1458. 按司護佐丸阿麻和利の変で滅ぶ。	1406. 首里王統一 室町時代 安土徳山時代 江戸時代 1573 1603 1868
1500 1600 1606. 薩摩藩が琉球に侵攻	
1800 1900	
1944 日本軍高射砲陣地、米軍の攻撃により壊滅的被害を受ける	1872. 琉球が廃止され沖縄県となる
1945 米軍ルーパー基地として使用	
1972 沖縄本土復帰により国指定史跡に指定 整備史跡事業開始	
2000 「琉球王国のグスク及び関連遺産群」世界文化遺産に登録	

3. 出土品及び遺構に見る歴史の様相

座喜味城趾は、第2次世界大戦下の米軍攻撃により、創建当時の城壁は破壊されていた。だが発掘調査によって次第にその輪郭を現してきた。そこで最初に発掘調査報告書(以後報告書という)を使用した(注5.6.7)。

発掘場所の層序は、日本軍や米軍の転用によって埋土が行われてきた。そこで調査に際して、これら埋土を取り除き、当時の地表を再現した。1~6次の発掘調査では、本丸、二の丸ともほぼ全ての敷地でおこなわれ、地表下約20cm~50cmの第II層以下の薄い層から当時の出土品、城壁根石及び建築物や階段の遺構跡を発掘している。

当時城壁は、損壊している箇所もあったが現在では全て復元されており往時の姿がみられる。

発掘された遺構の出土品点数(破片数)をまとめたのが表-2である。筆者がこれまで調べた城趾出土品数(注5)と比較すると座喜味城の出土数は低値である。

遺物の種類は、青磁、白磁、南蛮陶器、染付、古銭、カンザシ、緑釉陶器、土器等が二の郭から出土している。調理の食材などを保存する土器は少ない。陶器破片の過半は中国からの輸入品である。第3・4次調査は、一の郭全体の発掘をおこない、二の郭と比較すれば出土品数も多い。だが出土品種類は二の郭と同様である。

建築学的に興味を持つ建築資材に関しては、瓦の出土は皆無であった。このため建築の屋根は茅草きか板草きであったとみられる。

報告書でみる限り、生活の跡はみられるが、出土品の数の少なさから判断すれば、王宮として生活の跡が希薄な空間である。それは城主護佐丸が十数年程度の居住である事によるが、テンポラリーな城であったとも考えられる。

次に遺構をみてみよう。城壁跡は築城時の基礎部分が残

表-2. 座喜味城遺物集計表

二の丸第1次調査	層序No							合計
	表採	第1層	第2層 0-10	第2層 10-20	第2層 20-30	第2層 30-40	第2層 40-50	
青磁器(口縁,胴部,底部)	38	64	49	59	35	26	8	277
南瓷	18	59	41	47	39	14	3	221
染付(碗,小碗,皿)	2	2	2	2	4	0	0	12
白磁	1	0	1	2	0	0	0	4
古銭	0	5	0	1	0	0	0	6
カンザシ	0	0	0	2	0	0	0	2
土器	1	0	0	0	0	0	0	1
緑釉陶器	1	0	0	0	0	0	0	1
現代遺物	32	69	88	0	0	0	0	189
合計	91	199	181	113	78	40	11	713

二の丸第2次調査	層序				合計
	表採	第1層	第2層 0-10	第2層 10-20	
青磁器(口縁,胴部,底部)	11	3	14	5	33
南瓷	12	2	17	1	32
染付(碗,小碗,皿)	5	2	1	0	8
白磁	2	0	1	0	3
土器	0	1	0	0	1
現代遺物	20	112	1	0	133
合計	50	120	34	6	210

本の丸第2次調査	層序				合計
	表採	第1層	第2層 0-5	第2層 5-10	
青磁器(口縁,胴部,底部)	11	18	10	3	42
南瓷	29	28	3	7	65
染付(碗,小碗,皿)	5	0	0	0	5
白磁	1	0	0	0	1
土器	0	1	1	2	4
玉	0	1	0	0	1
現代遺物	25	4	0	0	29
合計	71	50	14	12	147

第3・4次調査	層序				合計	
	表採	第1層	第2層	第3層		
青磁器(口縁,胴部,底部)	7	30	22	82	22	163
白磁	0	2	0	9	18	29
国産和陶器	11	80	39	204	9	343
須恵器	0	2	0	0	0	2
土器	0	2	0	5	14	21
染付	4	11	5	43	25	88
石器	0	0	1	1	0	2
装身具(ジィファー)	0	0	2	0	0	2
鉄釘	0	0	1	7	1	9
貨銭	0	0	2	0	0	2
現代磁器	0	3	4	1	0	8
その他現代遺物	1	0	1	11	2	15
合計	23	130	77	363	91	684

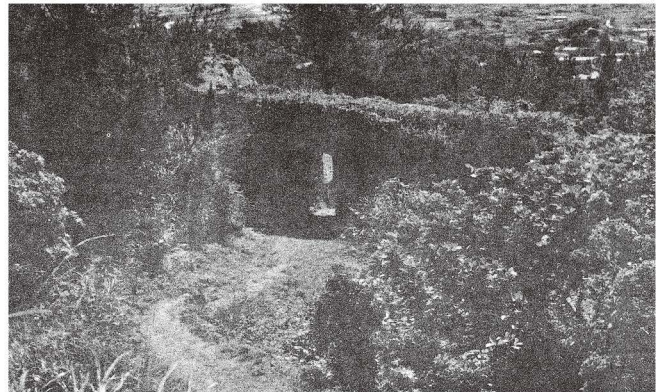


図-3.1. 二の丸拱門から整備着手前の状況(注6)

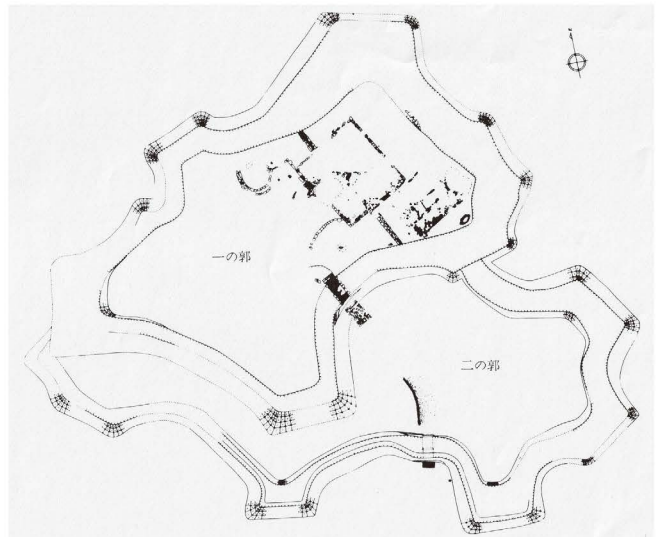


図-3.2. 座喜味城基礎平面図(注7)

されている他、一部に図3-1に示した二の郭拱門が、創建時の状態で残されており、アーチ状の頂部にはくさびが打ちこまれ強度を確保するなどの当時の建築技術の片鱗がわかる。残存する城壁部分の石積みは、相方積、布積、野面積がみられ軟弱地盤に対する工夫の跡と判断できる。

図3-2は、一の郭の発掘調査後の状況を記したもののだが、本殿とみられる建築礎石の跡が発掘されている。さらに城壁の左右から本殿に向かって石の壁が突き出ており、本殿建築物を介して空間を明確に二分してきたことがうかがえる。さらに本殿の南東方向に附属屋とみられる土杭のあとを多数発掘している。

さらに図3-3では、二の郭から一の郭に通じる拱門部分に石の階段跡が発掘されており、一の郭へのアクセスが明解である。

空間規模は、当時の城壁跡が残されていたことから、当時の空間規模を今に伝えている。こうした遺構の跡をたどれば、当時の建築も可能である。しかし本殿、附属屋及び

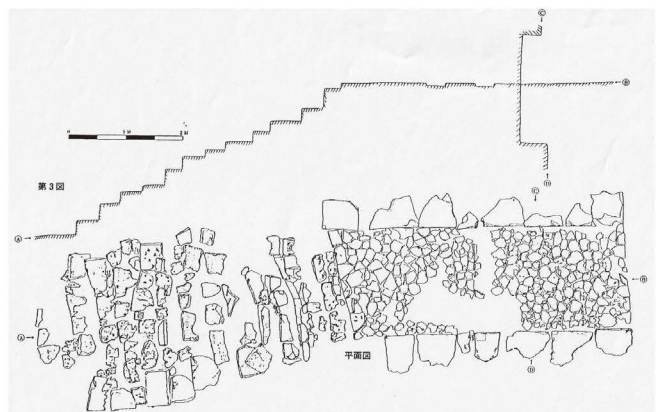


図-3.3. 一の郭への階段・拱門跡(注7)

南側の柱穴以外の建築遺構跡が発掘されていない。つまり前述以外は、皆無だったと考えられる。

城壁をなぞれば二の郭が西方向に広がり行き止まりとなる袋路がある。それは攻め込んできた武者達を誘い込む枡形のような役割と捉え城壁の形状を加味し軍事要塞だったとする報告書の解釈もある。一の郭に通じる拱門が正面に

見えているにも関わらず横に武者達を誘い込んだとする解釈に本稿では疑問を呈する。むしろ地形の状態や、軟弱地盤であるため一定規模以上の高い城壁が設けられなかったので二段組みにしたとする解釈もできるだろう。以上を本稿における空間構成上の知見とし、建築群の創造復元をおこなうことにする。

4. 座喜味城の空間構成

まず建築条件を探る。表1は首里城建築群の施設内容であり、王朝がおかれた時代に最大規模の施設であった。これを琉球巨大グスクの完成形と捉えれば、ここから減算して建築条件を導き出すことにした。

座喜味城は、居住年数が短い、建築遺構が少ないなど歴史、遺構から3つの建築遺構が発見されたが、それ以上の発見がなかったことを踏まえれば、必要最小限度の機能しか設けられなかった城である。当時の城としての必要最小限の機能がどのように定義づけられるかはわからないが、居住のための生活上不可欠な機能だけが設けられたと判断した。

そう考えると、本殿、書院、二階殿、料理座あるいは台所ぐらいは生活上必要な機能は存在していた可能性が高い。もちろん首里城のように建築毎に機能が分けられていたのではなく、むしろ限られた空間の使い方の中で機能の重複がはかられたのであろう。以上の考察をまとめると表3で示した居室有無の可能性評価になる。

本殿の役割を考えれば、祭祀はもとより地域統治的な役割、軍事的役割など多目的に利用されていたと考えられる。これを支える城主の生活機能が存在するのが付属屋である。城主はどこに寝泊まりし、日常生活がどこで行われていたかを考えれば本殿2階か附属屋ぐら이다。あるいは周辺の本宅から城に通っていたとするみかたもあるが、本宅跡などという遺構は座喜味城の周辺ではみられない。

5. 建築群の空間構成と配置

建築遺構跡は、本殿、附属屋、柱穴の3カ所である。順に空間構成について述べてゆこう。

本殿は、図4は、本殿跡を北東側、つまり本殿の背後から撮影したものである。最初に目に付くのが左右の城壁から本殿に向かってのびている袖壁跡である。これが本殿建築に接していた可能性はある。つまり袖壁と本殿を介して一の郭の空間構成が明確に二分されてきたことが解る。それは軍事的理由、あるいは公私といった空間の使われ方を分ける等の理由があったのだろう。

本殿遺構跡は、遺構調査によって建築柱の基礎である礎

表-3. 居室の役割と可能性評価

首里城施設内容	用途	可能性評価			
		清涼殿	轉運殿	中環城	座喜味城
正殿	王を中心とする祭祀がおこなわれた聖域空間。	○	○	○	○
北殿	格致、三司官が軍事事項を審議する場所。冊封司の接待の場所。	×	×	×	×
養神門・納殿	平時は集、茶、膳車などを取り扱う。神女達が神をもてなすところ。	△	×	×	×
黄金御殿(クカニウダン)	王や王妃の居室。	○	○	○	×
近衛詰所	行政に關わる官人などの詰め所で書所に隣接。	○	○	○	×
南殿	満年で日本の行事がおこなわれた場所。護衛の役人の接待所。	×	×	×	×
書院	行政施設の玄関。取り次ぎ、書院と隣接。	○	○	○	×
鎮の間	王子らが饗宴の賓客や知人を接待したところ。	×	×	△	×
書院	王が日常起居、行發事、冊封司の接待場所としても使われた。	○	○	○	○
奉行詰所	臣人、奉行役人などの詰め所と推定。	○	○	○	×
二階殿	王の日常の居室や書室。	○	○	○	○
書院(ユイシ)	王や家族の書事務所。	○	○	○	×
世添殿(よそえでん)	御内宿を宿經し、王夫人の住居。	○	×	×	×
世降殿	王が死去した際の継承者が即位の礼を受ける。	○	×	×	×
女官居室	御内宿に勤める女官達の居室。	○	○	○	×
西の書院	不明。	×	×	×	×
廊下	正殿と北殿や南殿をつなぐ。	△	×	×	×
養神殿	王が云の跡の書院安置所	△	×	×	×
料理座	格式の料理や使者、官人などの饗宴の料理を調理したところ。	△	△	○	○
大台所	格式の料理や、茶、珍饈、漬物などを取り扱っていた。	○	○	○	×
待合殿	王族の詰所を扱うところ。	×	×	×	×
待合殿	金銭、酒、食糧などを取り扱った。	○	○	○	×
倉庫	食糧同様の庫だったと推定した。	○	○	○	×
系図座	土族の家譜や王府の系譜編纂に關する業務をおこなう。	×	×	×	×
用物座	中国や日本との買物を取り扱う。	×	△	○	×
燈台屋	首里城には存在しない。	○	○	○	×

○存在、△不明、×存在しない

石が城郭創建当時のものと推定されており、礎石の外周は、報告書によれば横幅16m、奥行き14mとされている。この空間規模をみると2つの疑問がある。

第1の疑問は、柱間が南西面が5間、北東面が4間とする通り芯を通さない不規則な柱の配置である。それは建築構造力学上荷重のかかり方が異なってくる。とって桁を介して柱と梁が構造化できるので不可能な方法ではない。

第2の疑問は、通り芯に沿わない柱配列と中柱の欠如である。横16m、奥行14mの大きなスパン長である空間内部に内柱を設けず、屋根を梁と束で支えるだけで構造耐力が得られるかとする疑問である。

さらに本殿二階部分の空間に武器や武具などの倉庫を設けるならば、内柱の礎石跡が発掘されてよいはずである。だがこれは遺構調査では発見されていない。従って12~14mの空間を無柱で飛ばす建築構造上難がある空間だといえる。

このため礎石の大きさから判断し柱は直径2.5尺(750mm)以上の柱を用い、梁も相応の太さの部材を用いて屋根を支えたと考えざるを得ない。

以上の考察を踏まえ本殿の創造復元を試みたのが次頁の図5である。



図-4. 本殿跡

建築空間は全て尺間スケールを用いており、礎石の外周寸法を参照に近似値をとると、柱間は南西面で横5間、奥行2間、北東面4間とする方形に近い空間となり、先の外周寸法及び発掘された礎石群の寸法と近値してくる。

そこで平面図を起こしてみると、その室内はどのような空間だったかが次の課題になる。ここではこれまでの建築復元の経験から、おそらく御座所と土間があったと推測している。また御座所両サイドの破線で示した位置に構造柱が必要だと本稿では考えている。

本殿断面図は、この時代に存在した琉球民家の屋根勾配を採用している。この勾配であれば二階部分が設えられたと考えられる。二階部分は、北山監視や戦時の防衛といった軍事的役割を果たしていたとすれば、武具や武器などの倉庫に使用されたのではなかろうか。

以上の設えを加味し12mを1スパンで飛ばすとする構造には難点もあるが、柱梁そして桁は大きな寸法の部材が使われたと考えられる。

柱間5間、4間というプロポーションであれば屋根形状は入母屋と判断した。また出土品から瓦破片が全く発見され

ていないことから、屋根材は板葺きか茅葺きであったとみられる。

以上の考察の結果、本殿を建築空間化すると図5の建築図面が得られた。やはり室内の破線で示した位置には、建築構造上柱が必要だったとする疑問は残る。

次に附属屋の遺構と柱穴に従って建築空間化したのが図6である。これに至ったいきさつについて解説する。

附属屋は、前述したように本殿を介して袖壁で一の郭の二分された空間の最奥に位置している。附属屋規模は発掘された礎石の外周寸法を参考にして算出すると、短辺6m、奥行12m程度とわかる。尺間法で建築規模を算出すれば、短辺3間、奥行6間の大きさになる。2間四方の居室を設定すれば、3室の建築規模であり、沖縄地方の民家1軒の規模と類似してくる。

2間四方の居室は3室設けることができる。3室全てが居室であったか、それとも土間を設けたかはわからない。本稿では日常の使い勝手上、土間が1室あったと想定した。このようにして附属屋の空間構成ができる。さらに南東面に雨端と呼ぶ沖縄固有の空間様式を組みこんだ。このあた

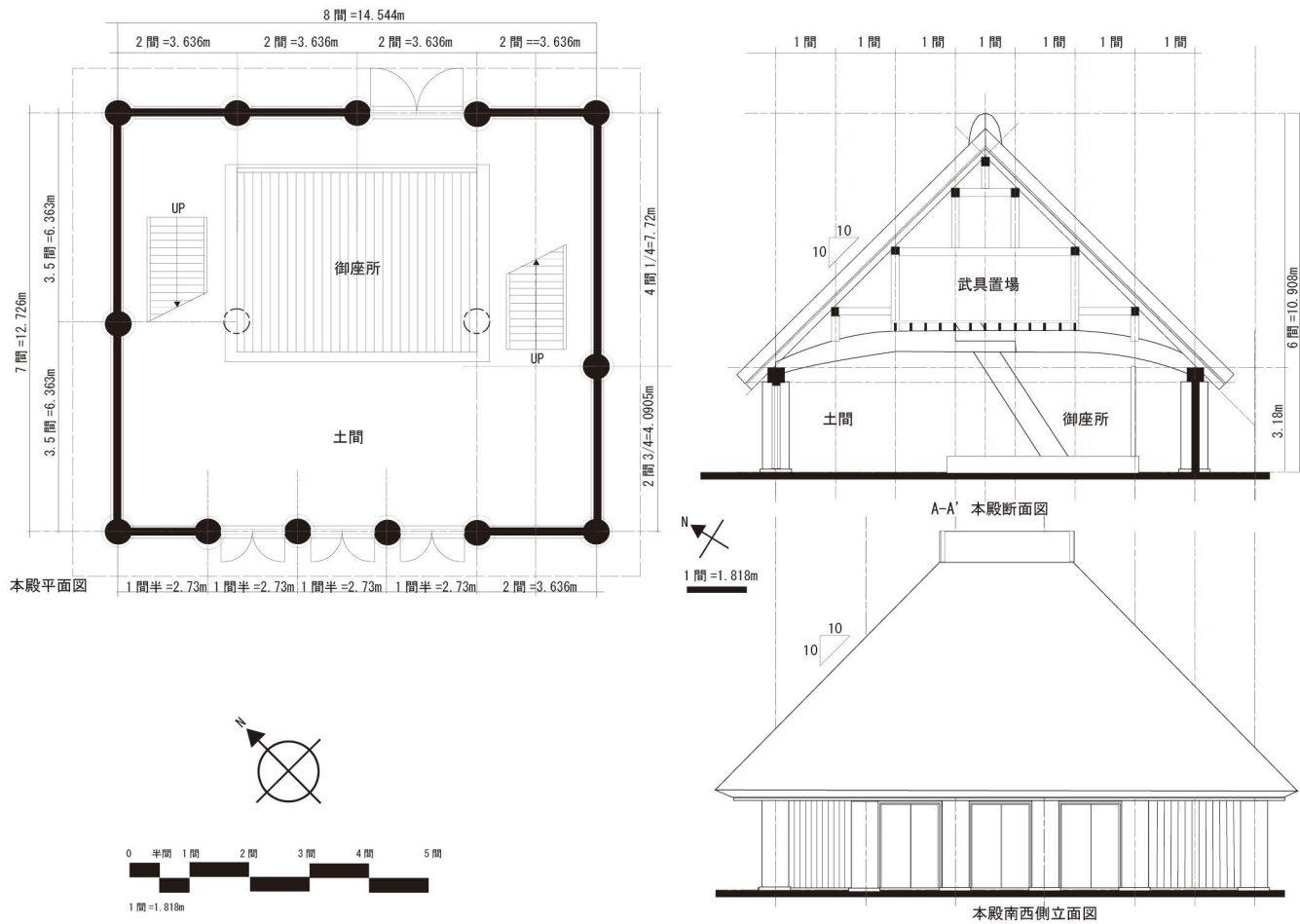


図-5. 本殿建築復元図

りが報告書で得られた情報の及ぶ範囲である。

城主の書齋や二階殿とよばれる日常の居室あるいは寝室は、この2室で行われていたと考えられる。それはこの地方の民家の起居様式と大差がなかったのだろう。附属屋が城主らの居住機能を設えていたとすれば、それは必要最小限度の機能であり、この2~3室で城主の書院や寝室などの日常の所作を兼ねていたことになる。

琉球史によれば城主護佐丸は、十数年後に中城城に移り住み居住年数が少ないということとも関係してこよう。

次に一の郭南面で発掘された多数の柱穴についてみてみよう。報告書では、一の郭城門南西側に図7で示す多数の柱穴遺構、排水口跡発掘している。

報告書に寄れば、柱穴は複数時にわたる建築物の建替を行ったと判断されており、全ての柱穴が座喜味城創建時のものではない。

まず柱穴は円形で筒型の大・中・小の大きさがある。大は径40cm深さ20cm、中は径25cm深さ20cm、小は15cm深さ8cmである。発掘調査では城壁建設以前に住まいが建てられていた痕跡もあり、建替前後の柱穴と考察されている。そのなかで中柱だけに敷石を確認しており、これが当時の柱穴だと述べている。柱穴の通芯を測定すると横1.8m、奥行2.5m、0.9mと横2.0mと奥行1.0mとする寸法を計測できる。

さらにこの建築に接続し排水路跡を発掘していること。出土品に青磁破片163点、白磁破片29点、黒褐釉陶器343破片、

土器21破片、染付88破片があること。さらに炭化穀物を発見している。これらの事から調査では城内全体をまかなう台所があったとしている。

したがって本稿では、寸法から判断し台所と、これに隣接する小屋掛けの食物倉庫だと解釈した。尺間法を採用すれば横2間と奥行2間の矩形の建築と、これに隣接する横2間。奥行1間の建築を想定した。

6. 城郭内の建築群の配置について

建築群の配置は遺構調査に基づいたものであるが、建築

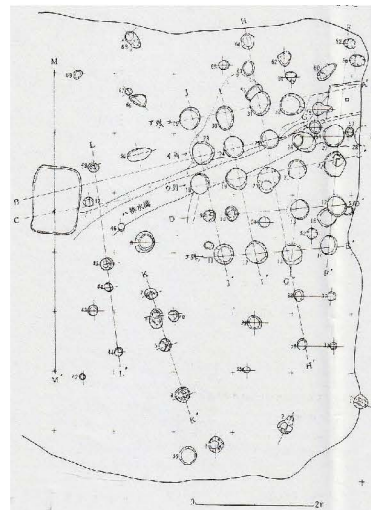


図-7. 柱穴遺構平面図

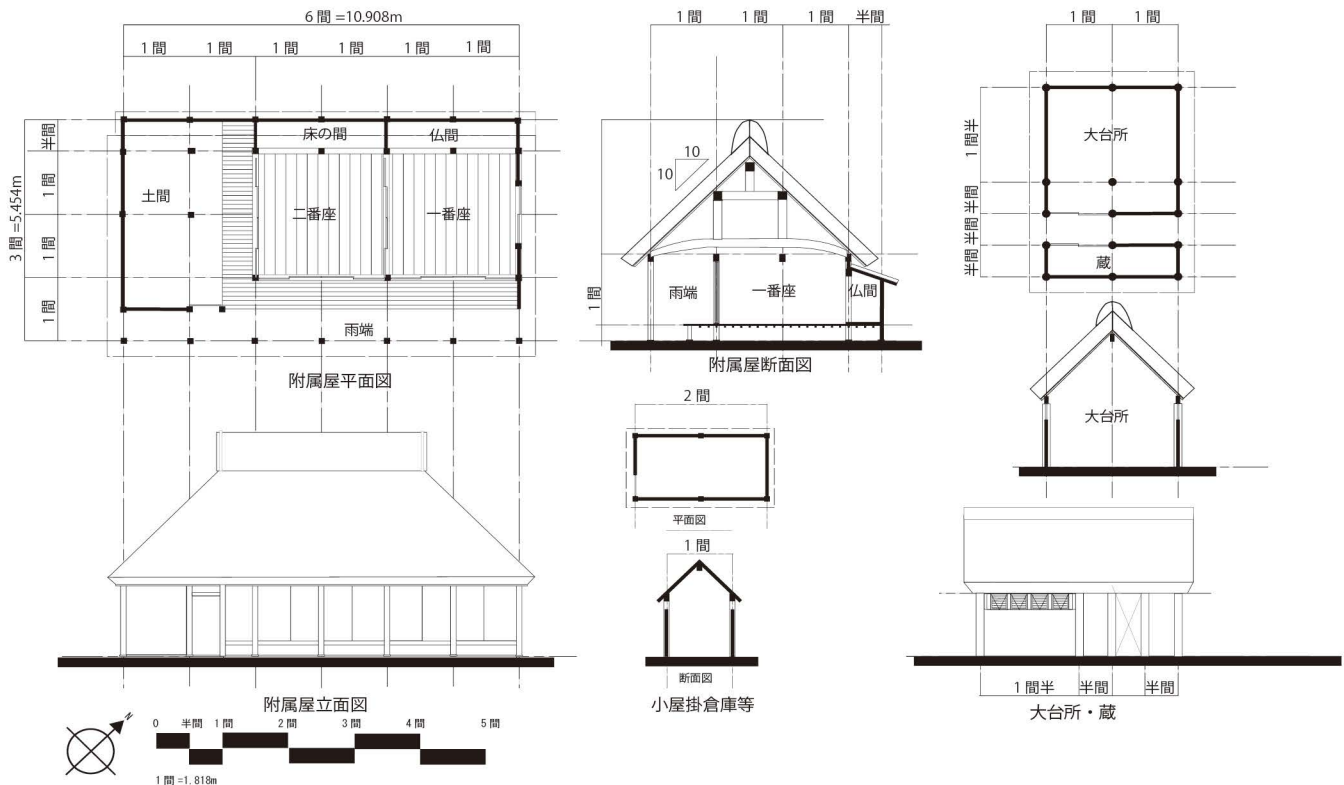


図-6. 附属屋、台所建築空間復元図

学的に関心を持つのが、図7で示した城壁と同様の素材で城壁両側から本殿に向かって伸びている袖壁である。この2つの袖壁と本殿を介して、明らかに空間を二分していることが特徴である。

こうした空間を二分するという考え方は、筆者の研究では、浦添城（注8）における10m以上のグラウンドレベル差、勝連城にみる一の郭と二の郭の城郭ゾーン分類にくわえ10m以上のグラウンドレベル差（注9）、中城城一の郭における1mのレベル差（注10）、そして座喜味城では本殿を介して袖壁で公私を明確に分けているといったように、各事例で共通してみられる設え方である。

こうした空間の二分化の理由を探ると、1つには城としての防衛上の理由、2つは城主らの私的居住生活と、祭事や地域統治、さらには海外交易などの公的生活といった機能上の違いを反映させたものだと考察できる。

本殿の背後には若干の空間があり、本殿と平行するように建築群があったのではないかとすることも考えられる。しかしそうした建築の必要性を見いだせる空間規模ではなく、やはり主要建築群は遺構調査通りだったと本稿では判断した。もちろん小屋がけ程度の痕跡を留めない建築は、僅かに存在していたのであろう。

そうした建築群の小ささでは、城主が附属屋で居住し、それ以外の側近達や兵士、あるいは役人達は麓から通ってきていたとするストーリーになる。

以上の配置図に従って3DCG化したのが次頁の図10である。閑散としていて本当にこれだけしかなかったのと思われるほど建築群の数は少なく、他方で城壁の完成度が高い。つまり城壁に重きを置いたとすれば、やはり防衛上の城郭だったのだろう。城主護佐丸は、この座喜味城に十数年ほど居住し、大規模空間を要する中城城へ移っていった。当時の沖縄において防衛の役割以上に重要な城の活動があった。それが海外との交易であったのだろう。

7. まとめ

建築創造復元を通じて考えさせられるのは、何故この程度の建築群しかないのに、完成度の高い堅固な城壁を築いたのかとする城主護佐丸の建設動機である。琉球統一という目標に向かっていった当時の時代状況から、防衛上の城郭であったとする説は城壁成立理由の1つであるが、それだけかとする疑問が付きまとう。

そうした疑問を発生させるのが空間を二分する使われ方である。浦添城、勝連城、中城城においてレベル差を設けて空間を二分している。さらには首里城でさえレベル差は



図-8. 城壁から伸びる袖壁

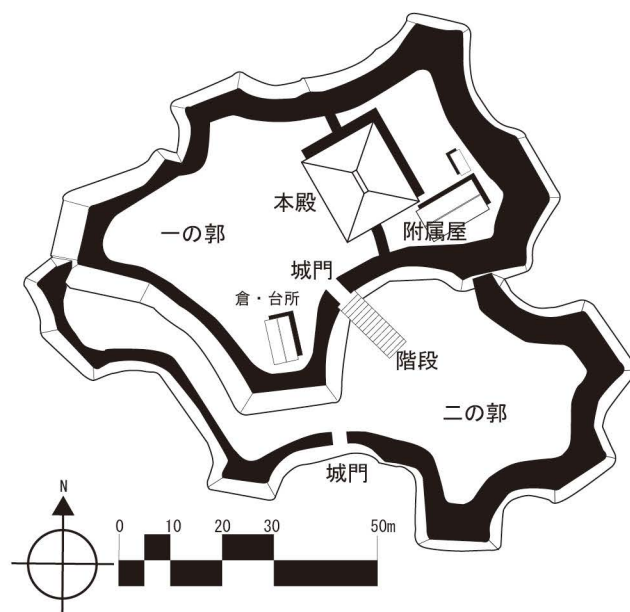


図-9. 配置図

小さいものの正殿を中心として表に向けた空間と、正殿裏の空間とは、明らかに使われ方が異なっている。それは巨大グスクに共通して見られる可能性を持っている。つまりこれらの城は軍事的役割と同時に、城主が居住する王宮としての空間を設えることに努めてきたのではなかろうか。

注及び参考文献

注1) 米軍地図 TAKASHIHO, 1:5000、沖縄県立公文書館所蔵地形図より描き起こした。

注2) 安里進、高倉倉吉、田名真之、豊見山和行、西里喜行、真栄平房昭：沖縄県の歴史・県史47、山川出版社、2012。

注3) 上里隆史、山本正昭：沖縄の名城を歩く、吉川弘文館、2019。

注4) 世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアムハンドブック、2021。

注5) 座喜味城跡遺構調査報告書(1)第1次・2次遺構発掘調査、沖縄県読谷村教育委員会、1975年

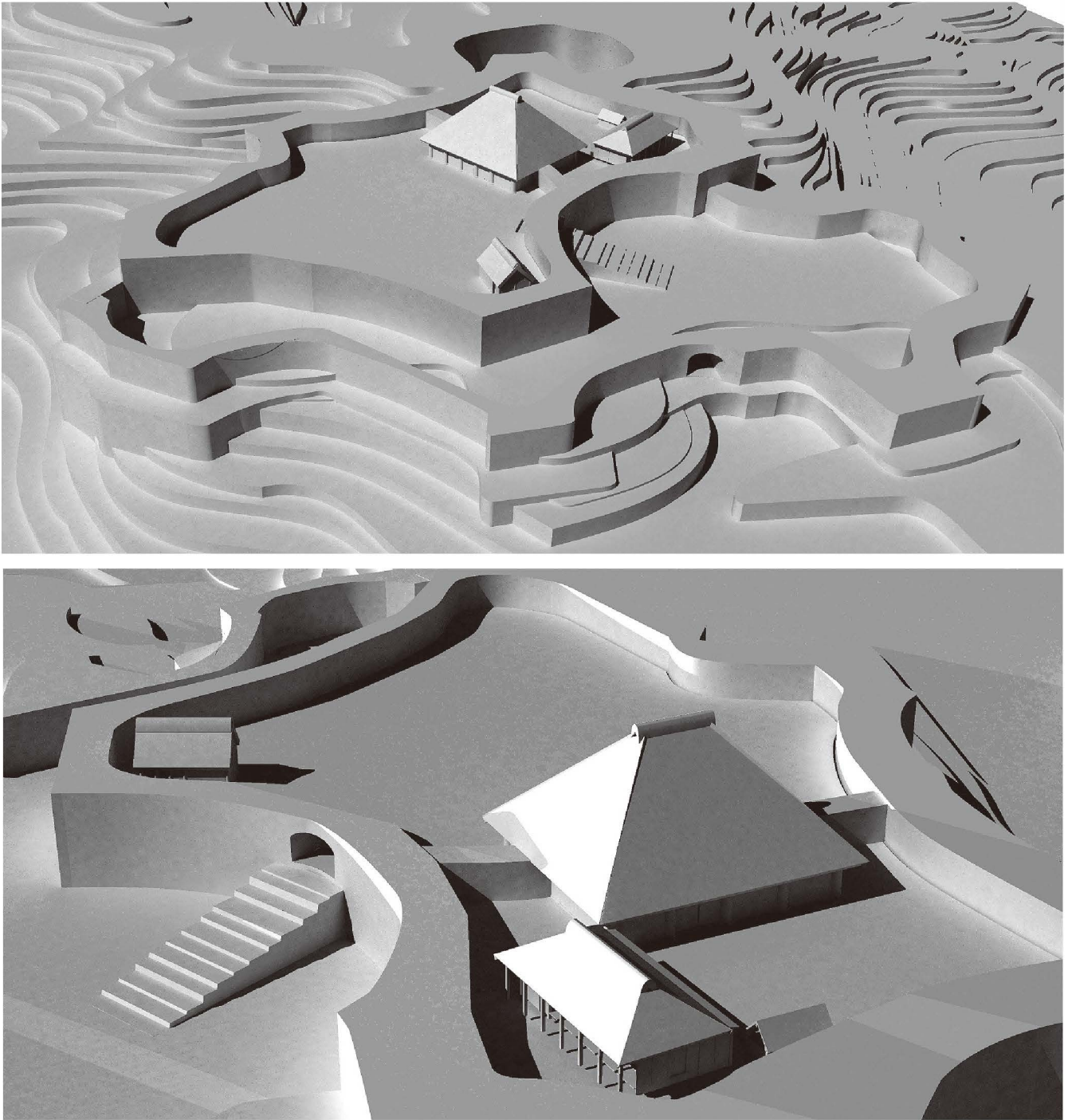


図-10. 座喜味城の3DCG

注6) 座喜味城跡第3次・第4次遺構調査、読谷村教育委員会、1977年

注7) 座喜味城跡(3)第5・6次発掘調査、読谷村教育委員会、1980年

注8) 三上訓顯：建築史上の2つの経験、芸術工学への誘い vol121, 2016, p3-18.

注9) 三上訓顯：沖縄県勝連城創造復元モデルに関する研究、芸術工学への誘い, vol24, 2019, p3-12.

注10) 三上訓顯：沖縄県中城城建築群の創造復元について、芸術工学への誘い, vol12, 2020, p3-12.